

令和5年度学校評価（自己評価・学校関係者評価）報告書

令和6年3月29日
学校法人けやき学園 けやき幼稚園

本園の教育方針・教育目標を踏まえたうえで、令和5年度における自己評価と学校関係者評価を実施したことを報告します。

I 教育目標と教育方針

| |
|---|
| 目標 : 武蔵野の土と緑のなかにあつて、自然に親しみ、明るく健康で質実な精神を養う |
| 方針 : <ul style="list-style-type: none"> ・少人数による家庭的な手作りの保育を行なう ・のびのびと遊ぶこと、規律を守ることの両立による集団生活を営む ・早期の知育に偏らず、人間関係の基礎を学ぶ場として多様な経験を得させる ・保護者との良好な信頼関係を築き、家庭と手を携えて園児の生活と安全を守る |

II 本年度(令和5年度)重点的に取り組むべき目標

建学の精神および幼稚園教育の本来の意義を踏まえつつ、地域や社会のニーズに応えながら、質の高い教育の実践を目指す。

III 評価項目の達成及び取り組み状況

| 評価項目 | 取り組み状況 | 評価 |
|-----------------------|---|--------|
| ① 少子化の中での縦割り保育の存続 | 年間を通じ定期的な縦割り保育日を設けるだけでなく、行事の中でも互いの成長を喜び合う環境を作った。コロナによる保育の制限、保護者参加の制約も早めに解除されて、運動会もちつきその他、コロナ以前の規模で、伝統と、縦割りの意義を活かすことできる展開であった。 | A |
| ② 保育の質の向上と多様化する社会のニーズ | 未就園児および卒園児まで広げて保育の中に取り込んでゆくことで、少人数化のなかでも縦割り保育の意義を活かし、保育の質の維持・向上に努めた。地域の中での子育て支援センター的な役割として乳幼児親子の居場所(ちょっぴりオアシス・陽だまりひろば・ミニ見にシアター、園庭開放等の事業を新設したり回数を増やしたりした)、小学生の居場所の要素(園文庫の貸し出し・サマースクールや各行事への小学生以上の参加)も取り込んでいった。ついで、保護者にも無償の英会話サロンやアロマセラピーサロン、サークルの場を提供するなどした。 | B ※ |
| ③ 運動能力の向上と情操教育の充実 | マスク着用などの制限のあった年度初めから積極的に戸外での活動、散歩を実施し、朝礼での体操や正課としての体育の時間を設け、コーディネーション・トレーニングも楽しみながら行えるようにした。制限の取れた5月以降は遠足・プール・宿泊保育等も計画通り実施し、秋の運動会は4年ぶりに半日から一日を通しての実施ができ、年度末の「歩け歩け遠足」では年長児は小金井公園往復を完歩する体力を身につけた。その他、美術講師による絵画・造形活動にも力を入れ、生の演奏や人形劇舞台などに接する機会も多く持つことが出来た。ネイティブスピーカーによる英語の時間は、英語教育のみならず、多様な他者との触れ合いの機会としても功を奏する。読み聞かせだけでなく、園文庫の貸し出しを定期的に行い豊かな心を育んだ。 | A |

| | | |
|------------|---|----------|
| ④ 建学の精神の保持 | 幼稚園への見方が社会的に変化しつつある今こそ、建学の精神に立ち返る必要があり、その意味で、幼稚園の歴史を振り返り、内容を盛り込んだ「けやきようちえんカルタ」を作成し、在卒園生や地域の方々に配布した。70周年記念集会を母の会の協賛を得て3月に開催し、創立時のエピソードや発足時からの写真を展示したり、融資卒園生や保護者によるコンサートを行ったりし、多くの方から変わらぬ良さへのご支持をいただけたと思う。年度末に行った保護者アンケートでも、建学の精神の保持を期待される声が多かった。 | A' ※※ |
|------------|---|----------|

評価 A：十分に成果があった B：成果があった C：少し成果があった D：成果がなかった

※ 保育の質の向上の成果は十分だが、未就園児対象事業では多くの取り組みを実際に行ったものの、参加者数が伸びず、ニーズの把握と事業に関する周知に努める側面があった。

※※伝統的な幼稚園教育に基づく建学の精神では、現在の社会的なニーズに応えきれない面もあり、プレ幼稚園の導入も検討しているため、ダッシュを付けた。

IV 総合的な評価結果

| 評価 | 理由 |
|----|---|
| A' | 各項目について重点的に取り組み、建学の精神および幼稚園教育の本来の意義を踏まえた質の高い教育が実践できた。保育の質を落とさず、地域や社会のニーズに応えるべく多くの事業を安全かつ有意義に行うことが出来た。 |

V 今後取り組むべき課題

| 課題 | 具体的な取り組み方法 |
|------------|---|
| ① 環境 | 学年別保育と、縦割り保育を、より日常的、効果的に行う工夫を計画的に行い、必要な環境設定を整える。集団での育ちあいを保障し、学年間だけでなく未就園児や小学生との交流を推進するための環境を工夫する。 |
| ② 安全 | 災害時の安全確保や、感染症対策など、教職員間での共通理解を促進し、訓練や研修などに努める。 |
| ③ 地域との連携 | 園の取り組みを保護者はじめ地域へ発信する一方、地域のニーズにも応えていく。 |
| ④ 建学の精神の保持 | 子育て支援のサービスの充実よりも、子どもの利益優先の学校教育としての建学の精神に常に立ち返って保育を行う。 |

VI 学校関係者評価委員会の評価

70周年事業の成果を見ても、地域に愛され評価されてきた園の歴史と現在の姿は十分評価できる。さらに、今年度の課題に対する取り組みは意欲的になされ、また成果もみられるが、現実には次年度園児の獲得にはつながらず、その原因が、園の在り方が時代や地域のニーズに合わなくなっているためか、その場合、建学の精神と幼稚園教育の本質とに照らして今後どのような展開が望ましいかを見極めていく必要がある。また、少子化や保育所化ニーズの高まり、発信力だけを原因とせず、謙虚に日々の保育の見直しも図って行くべきである。